（p. 54のつづき）　にわたる会議が開催され候。同夕はシムランに近きサアダーバードの『白宮殿』の庭でイラニスト一同，皇帝及び皇后の謁見を賜わり申候。同夜はシムランのダルバンド・ホテルにて宮内大臣シャファ氏主催の晩餐会開かれ申候。爾後毎夜，総理大臣等々の招宴続きいささか草臥れ申候。ただダルバンド・ホテルは，今次大戦の際，チャーチル，ルーズベルト，スターリンの有名なテヘラン会談の行なわれたる処に候。翌九月一日より正式の会議が開かれ申候。わが友であり先生であるシャファーグ博士は健在，ギルシュマン博士も元気に存候。レンツ氏も二年前と少しも不変，チェコのクリマ博士とも言葉をかわし貴殿の名をよく覚え居り候。アメリカのフライ氏，ドレスデン氏とも会い申候。会議は general assembly の外 sectional な meeting に分れ居候。小生は philological meeting に属し，三日の冒頭に paper を読むことに相成候。室は反響のみある極めて悪き室に存候。冷房装置もなく，先生方には大分弱られし方有之候。色々お話可申事有之候も，何れ帰国後お目にかかりし時に譲り申候。イスパハン・シーラーズの見学は飛行機のシートが一パイにて我々既知の人の多くは乍残念割愛仕候。何分，ヒルトン・ホテルと大学の間をバスで通う毎日にて殆んど市中には出ず，この二，三日市中をうろつきテヘランの気分を味い度候，その上帰国致度存居候。この日曜日には帰国，中旬には京都へ参るべく存居候。遙かに御健康祈上候　匆々」。　○**小林明美**氏（旧姓佐藤，京大大学院博士課程）は夫君小林信彦氏（ハーバード大留学中）の許へ９月３日羽田発で渡米された。　○**服部正明**氏（京大文学部助教授）はインド古典の講義を行なうため９月10日羽田発トロント大学へ。明年６月上旬帰国される予定。　○**長尾雅人**氏（京大文学部教授）はウイスコンシン大学の講義を終え欧州・イラン・アフガニスタン・インド経由９月14日羽田に帰着された（本誌15号参照）。　○**村田数之亮**氏（阪大名誉教授）の『ピエール・ドマルニュ著『ギリシア美術の誕生』』（高橋たか子氏と共訳）は10月25日発行（『人類の美術』５――新潮社）。　○**勝藤猛**氏（大阪外大助教授）は11月５日羽田発シーラーズの Pahlavi 大学に留学された。帰国予定は明年８月末。　○**加藤一朗**氏（関大文学部教授・本誌編集部員）監修の『古代エジプト』は11月23日発行（ライフ人間世界史14）。　○**藤吉慈海**氏（花園大教授）は台湾大学文学院に客座教授として仏教学講義のため12月１日京都発台北へ出張された。

京都大学文学部西アジア南アジア史学コース講義題目（昭和41年度）

研究	岩村　忍	〝大元馬政志〟を中心としその前後の馬政および西方遊牧民のウマの飼育，管理についての研究
〃	羽田　明	（未定）
〃	藤枝　晃	敦煌写本総説
〃	中村孝志	東南アジア近世史の研究
〃	清水　誠	初期イスラーム税制史研究
〃	杉　勇	古代オリエントの諸問題
〃	吉川　守	Babylonian Grammatical Texts の研究
研究	江上波夫	（未定）
〃	伊藤義教	ゾロアストラとその世界
〃	岩本　裕	インドネシアにおけるインド文化
演習	城崎　進	古典ヘブライ語文法及び「創世記」講読
講読	加藤一朗	ヒエログリフ講読
語学	大地原豊	初等サンスクリット文法
〃	加賀谷寛	近世インド語
〃	井本英一	近世イラン語
〃	田中四郎	アラビア語（初級・上級）

あとがき　○第17号をおくる。巻頭は香山教授をわずらわして本邦では未開の学田に発掘のスキをいれていただいた珠玉の論文，つづく２篇は本号も前号につづいて新進の雄篇，いずれも感謝にたえない。巻末のものは一編集子によるささやかな筆のすさび。　○苦節十年，本誌のめざましい躍進ぶりはご同慶の至りなれど，赤字のたくましい成長ぶりには関係者は頭がいたい。赤字とは申すまでもなく会費の滞納。乏しい中をやりくりして支えている窮状をよろしくご賢察のうえ，会費の滞納だけはなんとしてもお避けくださるよう，いくえにもお願い申しあげる。　○そのお願いついでにもう一つ。会員諸氏のご動静，何事によらず（ご身分の変動・著書の出版・海外ご出張その他）お知らせください。彙報記事の作成は難中の至難として編集子の泣き所，それだけにお知らせいただいた時の喜びはまた格別。加えて新会員でもご紹介賜わればこの上なしです。〔編集部記〕